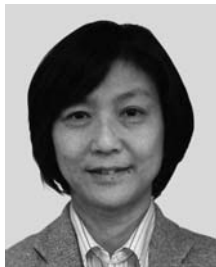


女性獣医師が当たり前になった時代に思う

白戸綾子[†] (獨家畜改良センター岩手牧場)



1 はじめに

編集部から「女性獣医師をテーマにした連載企画」との依頼を受けたものの、今は女性獣医師だからと、特別視されるような時代ではないように思われた。専門職として獣医師に求められるのは、獣医学的知識と技術、判断力、説明

力であり、性別はそれほど意味を持たないのではないだろうか。

それでも、女性獣医師が急激に増えたのは、ここ30年ほどのことであり、その時代の変化を我が身に重ねて振り返り、獣医師という肩書きを持ちつつ人生を歩んでいく同業の女性たちにエールを送りたいと思う。

2 女性獣医師の年代別分布と将来推計

少々古い資料になるが、平成19年5月に公表された「獣医師の需給に関する検討会報告書」(農林水産省)によれば、平成18年の女性の獣医師免許保有者(獣医師名簿登録者×生存率)は11,011人(22.7%)と推計された。また、18年12月31日の獣医師法22条の届出では、獣医事に従事する女性獣医師は7,323人(23.2%)であるが、図1に示すように女性の占める割合は若い世代ほど高い。但し、免許保有者を分母に活動獣医師の割合を就業率として表すと、男性に比べ女性は20%ほど低く、結婚・出産・育児等の影響が推測される(図2)。

しかし、獣医学系大学入学者の約半分は女性であり、今後とも獣医師として活動する女性が増加することは確実である。同報告書では、2040年の活動獣医師の女性比率を40%前後になると見通している。

3 4年制獣医の最後から2番目

私が帯広畜産大学に入学した1976年には、獣医学科の定員40名のうち、女子学生が7名だった。開学以来、クラスに1~2名だった女子学生が一気に増加したことになる。畜産分野に特化した大学だから、他の学科にも女子学生は少なかったが、少数派であることに何の不都合も感じなかった。先生方は卒業後の就職先をずいぶん

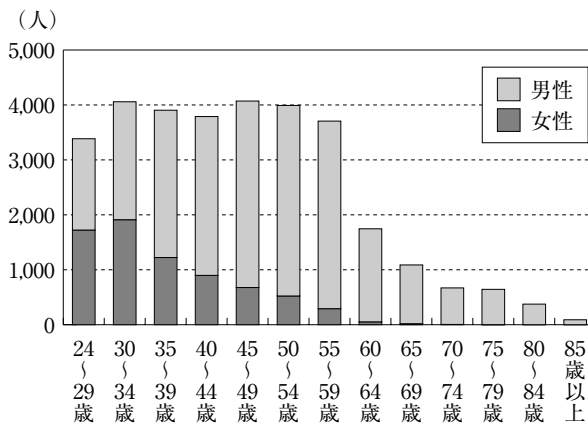


図1 年齢階層別・性別の獣医事従事者数 (平成18年獣医師法22条の届出による)

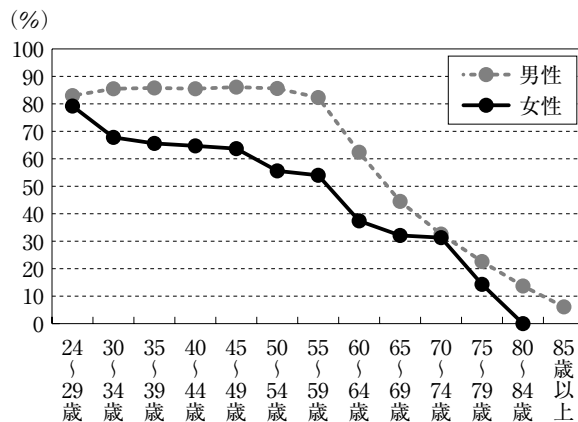


図2 年齢階層別の獣医事への就業率 (平成18年届出数/獣医師免許保有者)

心配されたと聞くが、本人たちは至ってノビノビと、社会の冷たい風を知らずに獣医師を目指していた。

しかし、いざ4年生になり就職先を求めた時に、女子学生に開かれた門は限られており、公務員か、小動物臨床か、または獣医師免許を必要としない仕事に就いた。私自身は、製薬会社に就職したものの、獣医師資格を活かす道が見えないことから、1年ほどで退社してしまった。畜産分野の仕事を望み、職安に通いつつ、公務員試験を受けて、卒後3年目にして獣医師としての職業生活をスタートさせることができた。

[†] 連絡責任者：白戸綾子 (獨家畜改良センター岩手牧場)

農林水産省で最初に配属されたのは、畜産局の家畜生産課。家畜改良増殖法の改正準備で忙しく、毎晩遅くまで仕事が山盛りだった。女性の深夜労働が禁止されていた時代であり、10時過ぎると庁内に女性の姿を見ることは稀で、書類を持って廊下を歩いていると、「まだ仕事してるの？」と声をかけられた。終電時刻を過ぎると、女性にタクシーチケットは出せないで、帰る方向が一緒の男性を待つことになった。それでも、同期の男性たちは泊まり込みが日常茶飯事で、家に帰れるだけ優遇されていたとも言える。

2年目には、青森の奥羽種畜牧場に転勤になり、1,500頭もの黒毛和種と日本短角種の診療や衛生検査を担当した。「牛のお医者さん」になれたのが嬉しくて、夜になって昼間の患者が気になると、パジャマにジャンパーを羽織って牛舎の様子を見に行ったりした（昔は防疫も緩かったですね）。畜産分野で働く女性獣医師はまだ珍しく、女性用の更衣室がなかったり、外部の会議に出たら「紅一点」のことも多くあった。

4 女性獣医師の増加と職域拡大

一方、1988年から少女コミックに「動物のお医者さん」が連載され、女子高生の獣医学科志望者が急増したと言われる。H大学獣医学部の学生を主人公として、個性的な大学院生、教授陣や動物たちが登場し、主人公の飼犬ハスキー犬がブームになった。後にはテレビドラマ化されるなど、獣医師の仕事が広く知られる好機ともなった。

また、1986年に雇用機会均等法が施行され、従来は男性中心の職種に女性の進出が増えていった時代とちょうど重なっている。女性獣医師を雇用したことがない農業共済組合や民間会社が勇気を出して、採用する事例が出てきた。雇う側とすれば、最初はお試し採用だったのかもしれないが、雇ってみたら「案外やるな」と思ったのだろう。先駆者となった女性獣医師の頑張りが、後輩たちの道を拓いていった。

また、獣医療の対象は動物だが、そこに必ず飼い主が介在し、コミュニケーションの質が医療成果にも影響してくる。女性獣医師には「話しやすい」というアドバンテージがあり、小動物のみならず、畜産農家で女性獣医師の評価は高いと聞く。

今はまだ、組織の管理職層や、獣医系大学の教員、獣医師会役員等において、女性は少数派だが、今後そうしたポストで仕事をする女性も増加するだろう。研究会など若い参加者が多い場では、女性獣医師の存在感が増しており、優秀な発表も多く、頼もしい限りである。

5 30年目のクラス会

一昨年、卒業30年目のクラス会で久しぶりに元女子

学生が集まった。卒業後の紆余曲折がありながら、7名ともが何らかの形で獣医師として働いていた。途中で転職したり、結婚・出産で家庭に居た時期もあり、子育てが一段落してから小動物病院を開業したり、食肉検査所に再就職したり、長く公務員として勤務した後に動物愛護のボランティア活動に携わっていたり、実に多様な人生経路である。

獣医師としての仕事の部分は男性と変わりなくとも、私生活の部分では、女性はかなり異なる状況に置かれる。特に、出産・育児は大事業であり、24時間の中でどう折り合いをつけていくか、女性獣医師の多くが悩むところである。背中に子供をおぶって犬の避妊手術をした、子供をベビーカーに置いて牛の人工授精をした、職場の休憩室に子供を連れて残業した、夫の転勤で退職せざるを得なかった、そんなエピソードがたくさんある。もちろん専門職として勉強を続ける努力も必要であったし、子供の病気や親の介護などを抱えた時期もあった。それぞれに困難な時期を乗り越えて、専門職として活躍の場を見いだしている今を互いに喜び合い、これからも頑張ろうね、と仲間たちと別れたのであった。

6 仕事と家庭のバランス

獣医師ばかりでなく、常に新しい知識や技術の習得を求められる仕事と、私生活のバランスを取ることは難しい。1日の限られた時間を、仕事と家庭にどう配分するか悩み、子供が小さい頃は「1日が28時間あれば！」といつも思っていた。仕事と家庭の「両立」とはほど遠く、その時々で優先順位をつけるしかなく、一生懸命やっても、職場にも家庭にも後ろめたい気持ちを抱えていた。子育て年齢の女性獣医師は、きっと同じような気持ちで奮闘していることだろう。「そのうち絶対、楽になるからね」と声をかけたくなる。

子供の手が離れてくると、時間と気持ちの余裕が生まれてきたが、あの綱渡りのような時期を過ごしたからこそ感じられる気持ちだと思う。中高年女性が元気と言われる日本社会だが、若い時の負荷の大きさの反動かも知れない。現在の私は、独立行政法人の育種牧場を管理する立場で、牛の診療をすることは殆どないが、優秀な乳用牛を作るといふ本業と、消費者や子供達に畜産や酪農のことを知ってもらう教育ファーム活動などにやり甲斐を感じている。そして、今は家を空けて学会や研究会に参加することもでき、獣医学の新たな知見に触れ、刺激を受けることが大きな楽しみとなっている。

7 獣医師である生活者として社会に貢献する

2000年にBSEの国内発生を機に、食の安全への関心が高まり、動物に関する専門知識を人の健康にも活かす獣医師の役割が再認識された。病原性大腸菌等の食中毒

や、BSE、鳥インフルエンザが社会的問題となる時、多くの消費者が科学的に正しい知識を知りたいと思うが、なかなかわかりやすく情報が提供されない現状がある。食品衛生や動物疾病の基礎的な知識を有している獣医師は、風評被害を防止したり、貴重な食料資源の廃棄を減らすべく、正しい情報の伝達者になれるはずである。獣医師であると同時に、生活の多くを担う女性であれば、草の根的なリスクコミュニケーションの担い手になれる

のではないかと思う。

今後、高齢となる女性獣医師は、生涯獣医師であることをどう社会に活かしていけるだろうか。獣医師免許に有効期限がないことの重みを考えつつ、生活者と獣医師の経験を混合して、私なりに社会で活動する術を探っていきたい。

そして、40年目、50年目のクラス会で、女友達の輝きを確かめたいと思う。